

## PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 2003-261850  
(43)Date of publication of application : 19.09.2003

---

(51)Int.Cl. C09J165/00  
C09J109/02  
C09J123/06  
C09J123/28  
C09J161/10

---

---

(21)Application number : 2002-062868	(71)Applicant : NOK CORP
(22)Date of filing : 08.03.2002	(72)Inventor : FUKAZAWA KIYOBUMI KAISE TOMOHIRO

---

**(54) VULCANIZING ADHESIVE COMPOSITION****(57)Abstract:**

**PROBLEM TO BE SOLVED:** To provide a vulcanizing adhesive composition used for vulcanizing and bonding a metal to a (hydrogenated) nitrile rubber, which is effectively used for the (hydrogenated) nitrile rubber having a nitrile content of 18-48% and prevents decrease in adhesive property, even after being soaked in various coolants such as a chlorofluorocarbon gas, a polyalkylene glycol and water for a long time.

**SOLUTION:** The vulcanizing adhesive composition comprises 100 pts.wt. phenol xylylene resin or phenol biphenyl resin, about 10-1,000 pts.wt. resol phenol resin, 0-1,000 pts.wt. novolac phenol resin, 10-1,000 pts.wt. unvulcanized nitrile rubber and 10-500 pts.wt. chlorinated polyethylene.

---

**LEGAL STATUS**

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2003 Japan Patent Office

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開2003-261850

(P2003-261850A)

(43) 公開日 平成15年 9 月 19 日 (2003. 9. 19)

(51) Int.Cl. <sup>7</sup>	識別記号	F I	テマコード <sup>*</sup> (参考)
C 0 9 J 165/00		C 0 9 J 165/00	4 J 0 4 0
109/02		109/02	
123/06		123/06	
123/28		123/28	
161/10		161/10	
審査請求 未請求 請求項の数 4 O L (全 6 頁)			
(21) 出願番号	特願2002-62868 (P2002-62868)	(71) 出願人	000004385 エヌオーケー株式会社 東京都港区芝大門 1 丁目 12 番 15 号
(22) 出願日	平成14年 3 月 8 日 (2002. 3. 8)	(72) 発明者	深澤 清文 神奈川県藤沢市辻堂新町 4-3-1 エヌ オーケー株式会社内
		(72) 発明者	貝瀬 友宏 神奈川県藤沢市辻堂新町 4-3-1 エヌ オーケー株式会社内
		(74) 代理人	100066005 弁理士 吉田 俊夫 (外 1 名)
		最終頁に続く	

(54) 【発明の名称】 加硫接着剤組成物

(57) 【要約】

【課題】 金属と(水素化)ニトリルゴムとの加硫接着に用いられる加硫接着剤組成物であって、ニトリル含量が18~48%の(水素化)ニトリルゴムに有効に使用され、さらにフロンガス、ポリアルキレングリコールまたは水などの各種冷媒に長時間浸せきした場合にもその接着性の低下が抑えられるものを提供する。

【解決手段】 フェノールキシレリン樹脂またはフェノールビフェニル樹脂100重量部、レゾール型フェノール樹脂約10~1000重量部、ノボラック型フェノール樹脂0~1000重量部、未加硫のニトリルゴム10~1000重量部および塩素化ポリエチレン10~500重量部を含有してなる加硫接着剤組成物。

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 フェノールキシレリン樹脂またはフェノールビフェニル樹脂100重量部、レゾール型フェノール樹脂10～1000重量部、ノボラック型フェノール樹脂0～1000重量部、未加硫のニトリルゴム10～1000重量部および塩素化ポリエチレン10～500重量部を含有してなる加硫接着剤組成物。

【請求項2】 有機溶剤溶液として調製された請求項1記載の加硫接着剤組成物。

【請求項3】 金属と(水素化)ニトリルゴムとの加硫接着に用いられる請求項1または2記載の加硫接着剤組成物。

【請求項4】 冷媒用シールを形成する金属と(水素化)ニトリルゴムとの加硫接着に用いられる請求項3記載の加硫接着剤組成物。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、加硫接着剤組成物に関する。更に詳しくは、金属と(水素化)ニトリルゴムとの加硫接着などに有効に用いられる加硫接着剤組成物に関する。

## 【0002】

【従来の技術】金属とニトリルゴム(NBR)との接着には、塩化ゴム系またはノボラック型フェノール樹脂系接着剤が用いられている。この内、塩化ゴム系接着剤については金属との接着性がないため、別にフェノール系の下塗り剤を塗布しておくことが必要であり、また高粘度であって塗布作業性が悪く、さらに良好な接着性を得るためには少なくとも5 $\mu$ m以上の膜厚が必要で、寸法制度の必要な部品や嵌め込み部品などの場合に障害となるといった問題があった。一方、ノボラック型フェノール樹脂系接着剤の場合、ニトリル含有量が30～40%の(水素化)NBRにしか接着しないため適用ゴム範囲が狭く、また硬化剤としてヘキサメチレンジアミンを含有するため、乾燥、焼付け時にガスが発生し、乾燥器内を汚染するといった問題があった。さらにこれらいずれ接着剤も、フロンガス、水、PAG(ポリアルキレングリコール)などの各種冷媒への耐性が悪く、冷媒用シールへの適用は困難であった。

【0003】かかる問題点を解決すべく、本出願人は先にレゾール型フェノール樹脂、未加硫NBRおよび塩素化ポリエチレンなどを必須成分とする加硫接着剤組成物を提案している(特開平6-306340号公報、同8-302323号公報)。しかし、これらの組成物を用いた場合、ニトリル含量30未満の(水素化)NBRについては、良好な接着性が得られるものの、ニトリル含量40以上の(水素化)NBRについては、なお良好な接着性を示すものではなく、また各種冷媒への耐性は上記塩化ゴム系またはフェノール系接着剤よりもすぐれてはいるものの、現在要求されているレベルを満足させるものではなかった。

## 【0004】

【発明が解決しようとする課題】本発明の目的は、金属と(水素化)ニトリルゴムとの加硫接着に用いられる加硫接着剤組成物であって、ニトリル含量が18～48%の(水素化)ニトリルゴムに有効に使用され、さらにフロンガス、ポリアルキレングリコールまたは水などの各種冷媒に長時間浸せきした場合にもその接着性の低下が抑えられるものを提供することにある。

## 【0005】

【課題を解決するための手段】かかる本発明の目的は、フェノールキシレリン樹脂またはフェノールビフェニル樹脂100重量部、レゾール型フェノール樹脂約10～1000重量部、ノボラック型フェノール樹脂0～1000重量部、未加硫のニトリルゴム10～1000重量部および塩素化ポリエチレン10～500重量部を含有してなる加硫接着剤組成物によって達成される。

## 【0006】

【発明の実施の形態】フェノールキシレリン樹脂は、1,4-ビス(アルコキシメチル)ベンゼンとフェノールまたはその2,4位に少なくとも1ヶのメチロール基を有するフェノール誘導体との縮重合反応物であり、実際には市販品、例えば明和化成製品MR-7800を用いることができる。また、フェノールビフェニル樹脂は、4,4'-ビス(アルコキシメチル)ビフェニルとフェノールまたはその2,4位に少なくとも1ヶのメチロール基を有するフェノール誘導体との縮重合反応物であり、実際には市販品、例えば明和化成製品MR-7850をそのまま使用することができる。

【0007】フェノール樹脂としては、レゾール型フェノール樹脂またはこれにノボラック型フェノール樹脂を併用したものが用いられる。レゾール型フェノール樹脂としては、フェノール類とホルムアルデヒドとをアルカリ性触媒の存在下で縮合反応させることによって得られるものが用いられる。この際フェノール類としては、フェノール、p-クレゾール、m-クレゾール、p-第3ブチルフェノール等のフェノール水酸基に対してo-位および/またはp-位に2個または3個の置換可能な核水素原子を有するフェノール類またはこれらの混合物等が用いられ、またアルカリ性触媒としては、アンモニア、アルカリ金属水酸化物、水酸化マグネシウム等が用いられる。これらのレゾール型フェノール樹脂のうち、好ましくはm-クレゾールおよびp-クレゾールの混合物とホルムアルデヒドから製造されたものが用いられる。

【0008】また、ノボラック型フェノール樹脂としては、フェノール類とホルムアルデヒドとを酸性触媒の存在下で縮合反応させることによって得られる樹脂が用いられる。この際フェノール類としては、フェノール、p-クレゾール、m-クレゾール、p-第3ブチルフェノール等のフェノール水酸基に対してo-位および/またはp-位に2個または3個の置換可能な核水素原子を有するフェノール

ル類またはこれらの混合物等が用いられ、また酸性触媒としては、しょう酸、塩酸、マレイン酸等が用いられる。

【0009】未加硫のニトリルゴムとしては、市販品である極高ニトリル含量(ニトリル含量43%以上)、高ニトリル含量(同36~42%)、中高ニトリル含量(同31~35%)、中ニトリル含量(同25~30%)および低ニトリル含量(同24%以下)の各種ニトリルゴムを任意に用いることができるが、好ましくは中高ニトリル含量のものが使用される。

【0010】塩素化ポリエチレンとしては、好ましくは塩素含有量が60~70%程度の高塩素化タイプが用いられる。

【0011】以上の各成分は、フェノールキシレリン樹脂またはフェノールビフェニル樹脂100重量部に対して、レゾール型フェノール樹脂が約10~1000重量部、好ましくは約20~400重量部、ノボラック型フェノール樹脂が0~1000重量部、好ましくは0~100重量部、未加硫のニトリルゴムが10~1000重量部、好ましくは20~300重量部、また塩素化ポリエチレンが10~500重量部、好ましくは10~200重量部の割合でそれぞれ用いられる。レゾール型フェノール樹脂またはこれとノボラック型フェノール樹脂の割合がこれより多い場合には、フロンまたは水に対する接着耐久性が低下し、一方これより少ない割合で用いられると初期における金属面との接着性が低下するようになる。また、未加硫ニトリルゴムがこれより多い割合で用いられると金属面との接着性が低下する他、粘度上昇が大きく、塗布作業に支障をきたすようになり、これより少ない割合で用いられた場合には接着させるニトリル系ゴムとの相溶性が低下し、接着不良が

#### 実施例1

フェノールキシレリン樹脂 (明和化成製品MR-7800 固形分70%)	143(100)
レゾール型フェノール樹脂 (大日本インキ化学工業製品AF-2639L 固形分60%)	67(40)
未加硫ニトリルゴム(日本合成ゴム製品N-237)	40
塩素化ポリエチレン(ダイソー製品Z-200)	20
メチルエチルケトン	1865
トルエン	1865

【0017】

40

#### 実施例2

フェノールキシレリン樹脂 (明和化成製品MR-7800 固形分70%)	143(100)
クレゾール変性ノボラック型フェノール樹脂 (大日本インキ化学工業製品KA-1053L 固形分40%)	20(8)
レゾール型フェノール樹脂 (大日本インキ化学工業製品AF-2639L 固形分60%)	53(32)
未加硫ニトリルゴム(日本合成ゴム製品N-237)	40
塩素化ポリエチレン(ダイソー製品Z-200)	20
メチルエチルケトン	1862

おこるようになる。さらに塩素化ポリエチレンがこれより多い割合で用いられると、接着相が脆くなり、強度低下につながり、これより少ない割合で用いられるとゴムとの反応性低下により接着性が悪くなる。

【0012】これらの各成分を必須成分とする加硫接着剤組成物は、各成分をメチルエチルケトン、メチルイソブチルケトン等のケトン類またはトルエン、キシレン等の芳香族炭化水素などの有機溶剤単独または混合溶剤に固型分濃度が3~10重量%になるように溶解して液状として調製される。

【0013】以上の各成分よりなる加硫接着剤組成物を用いての加硫接着は、加硫接着剤組成物を軟鋼、ステンレススチール、アルミニウム、アルミニウムダイキャスト、黄銅、亜鉛等の金属上にこれを塗布し、室温下で風乾させた後、約100~200℃で約5~30分間程度の乾燥を行い、そこに未加硫の(水素化)ニトリルゴム配合物を接合させ、(水素化)ニトリルゴムの加硫温度である約150~200℃で加圧加硫させることによって行われる。

【0014】

【発明の効果】本発明に係る加硫接着剤組成物は、金属と(水素化)ニトリルゴムとの加硫接着に際し、ニトリル含量が18~48%の(水素化)ニトリルゴムに有効に適用され、さらにフロンガス、ポリアルキレングリコールまたは水などに長時間浸せきした場合にもその接着性の低下が抑えられるといった効果を奏する。

【0015】

【実施例】次に、実施例について本発明を説明する。なお、単位は重量部であり、カッコ内の値は固形分重量を示している。

【0016】

5

6

【0018】

トルエン	1862
実施例 3	
フェノールビフェニル樹脂	143(100)
(明和化成製品MR-7851 固形分70%)	
レゾール型フェノール樹脂	67(40)
(大日本インキ化学工業製品AF-2639L 固形分60%)	
未加硫ニトリルゴム(日本合成ゴム製品N-237)	40
塩素化ポリエチレン(ダイソー製品Z-200)	20
メチルエチルケトン	1865
トルエン	1865

【0019】

実施例 4	
フェノールビフェニル樹脂	143(100)
(明和化成製品MR-7851 固形分70%)	
クレゾール変性ノボラック型フェノール樹脂	20(8)
(大日本インキ化学工業製品KA-1053L 固形分40%)	
レゾール型フェノール樹脂	53(32)
(大日本インキ化学工業製品AF-2639L 固形分60%)	
未加硫ニトリルゴム(日本合成ゴム製品N-237)	40
塩素化ポリエチレン(ダイソー製品Z-200)	20
メチルエチルケトン	1862
トルエン	1862

【0020】

比較例 1	
レゾール型フェノール樹脂	167(100)
(大日本インキ化学工業製品AF-2639L 固形分60%)	
未加硫ニトリルゴム(日本合成ゴム製品N-237)	28
塩素化ポリエチレン(ダイソー製品Z-200)	14
メチルエチルケトン	916
トルエン	916

【0021】

比較例 2	
レゾール型フェノール樹脂	167(100)
(大日本インキ化学工業製品AF-2639L 固形分60%)	
クレゾールノボラック型エポキシ樹脂	40
(大日本インキ化学工業製品エピクロンN695)	
未加硫ニトリルゴム(日本合成ゴム製品N-237)	40
塩素化ポリエチレン(ダイソー製品Z-200)	20
メチルエチルケトン	1867
トルエン	1867

【0022】

比較例 3	
クレゾール変性ノボラック型フェノール樹脂	250(100)
(大日本インキ化学工業製品KA-1053L 固形分40%)	
レゾール型フェノール樹脂	167(100)
(大日本インキ化学工業製品AF-2639L 固形分60%)	
未加硫ニトリルゴム(日本合成ゴム製品N-237)	58
塩素化ポリエチレン(ダイソー製品Z-200)	29
メチルエチルケトン	2618

## 【0023】比較例4

塩素系ゴムベース接着剤(ロードファースト製品ケムロック252X)

【0024】以上の各成分からなる実施例1~4および比較例1~4の加硫接着剤組成物を、リン酸亜鉛処理した軟鋼板上に塗布し、室温条件下に10分間放置して風乾させた後、150℃の焼付温度で10分間の焼付処理が行われた。

【0025】これらの加硫接着剤焼付軟鋼板に、下記配合例1~3の未加硫水素化ニトリルゴムコンパウンド(単位は重量部である)を接合させ、180℃、6分間の加圧加硫が行われた。得られた加硫接着物について、初期接着性試験、耐水試験、耐PAG試験および耐フロン試験が行われた。

\* 初期接着性試験: JIS K6256 90° 剥離試験

耐水試験: JIS K6256 90° 剥離試験片を80℃の温水中に浸せきし、100時間後に剥離試験を実施

耐PAG試験: JIS K6256 90° 剥離試験を150℃のPAG(ポリアルキレングリコール)オイル中に浸せきし、100時間後に剥離試験を実施

耐フロン試験: 接着剤を塗布したJIS K6256 90° 剥離用の金属板上に0.5mm厚みのゴムシートを加圧加硫成形して得られたサンプルを圧力容器中に入れ、そこにフロンガス(R134a)を注入し、40℃の環境下に24時間放置後サンプルを取り出し、150℃オープン中で1時間加熱し、その際に接着界面に発生したフロンガスによる発泡起点の数をカウント

【0026】

(水素化ニトリルゴム配合例1~3)

	配合例1	配合例2	配合例3
HNBR(日本ゼオン製品Zetpol2020; CN36%)	100	100	
HNBR( " 1020; CN44%)			100
N990カーボンブラック	10	140	
SRFカーボンブラック			51
ホワイトカーボン(比表面積70m <sup>2</sup> /g)	60		
酸化亜鉛	5	5	5
ステアリン酸	0.5	0.5	0.5
ジフェニルアミン系老化防止剤 (大内新興製品ノクラックCD)	1.5	1.5	0.5
イミダゾール系老化防止剤 (大内新興製品ノクラックMB)	1.5	1.5	2
1,3-ジ(第3ブチルパーオキシイソプロピル) ベンゼン(濃度40%)(日本油脂製品ペロキシモンF40)	10	10	10
アジピン酸系可塑剤(旭電化製品RS107)	10	10	2
ビニルシラン化合物(日本ユニカー製品A151)	2		
加工助剤(ヒュルス製品ベストネマー8012)		5	5

【0027】得られた結果は、次の表1~3に示される。

【0028】

表1(配合例1)

	実施例				比較例			
	1	2	3	4	1	2	3	4
〔初期接着性試験〕								
接着強度(N/mm)	18.8	18.8	18.6	18.9	8.8	6.5	18.8	18.9
ゴム残率 (%)	100	100	100	100	10	0	100	100
〔耐水試験〕								
接着強度(N/mm)	18.5	18.5	18.5	18.5	-	-	18.5	10.1
ゴム残率 (%)	100	100	100	100	-	-	100	0
〔耐PAG試験〕								
接着強度(N/mm)	17.5	17.5	17.5	17.5	-	-	17.5	16.5
ゴム残率 (%)	100	100	100	100	-	-	100	80
〔耐フロン試験〕								
発泡数	0	0	0	0	-	-	6	20

【0029】

表2(配合例2)

	実施例				比較例			
	1	2	3	4	1	2	3	4
〔初期接着性〕								
接着強度(N/mm)	17.9	18.1	17.9	17.8	17.8	17.7	17.9	17.9
ゴム残率 (%)	100	100	100	100	100	100	100	100
〔耐水試験〕								
接着強度(N/mm)	17.5	17.3	17.1	17.3	11.1	17.1	17.5	8.5
ゴム残率 (%)	100	95	100	90	20	70	70	0
〔耐PAG試験〕								
接着強度(N/mm)	17.5	17.5	17.5	17.5	17.3	16.5	17.5	16.5
ゴム残率 (%)	100	100	100	100	100	90	100	70
〔耐フロン試験〕								
発泡数	0	0	0	0	3	7	5	15

【0030】

表3 (配合例3)

	実施例				比較例			
	1	2	3	4	1	2	3	4
〔初期接着性〕								
接着強度(N/mm)	17.1	17.2	17.1	17.3	17.0	17.2	17.2	17.2
ゴム残率 (%)	100	100	100	100	100	100	100	100
〔耐水試験〕								
接着強度(N/mm)	16.9	16.8	16.9	16.9	14.5	15.9	15	6.5
ゴム残率 (%)	100	100	100	100	50	80	60	0
〔耐PAG試験〕								
接着強度(N/mm)	17	16.8	16.9	16.9	16.4	16.9	16.9	12
ゴム残率 (%)	100	100	100	100	90	100	100	60
〔耐フロン試験〕								
発泡数	0	0	0	0	1	3	6	10

フロントページの続き

Fターム(参考) 4J040 CA071 CA072 DA021 DA022  
 DA181 DA182 EB051 EB052  
 EL011 EL012 JA02 LA06  
 MA02 MA12 NA22